

## ささらと芸能 彫を使用する風流踊を中心に

著者	中村 茂子
雑誌名	芸能の科学
号	16 : 芸能論考IX
ページ	81-102
発行年	1988-03-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1440/00002996/">http://id.nii.ac.jp/1440/00002996/</a>



さ  
さ  
ら  
と  
芸  
能

——  
簞すりざさらを使用する風流踊を中心に——

中  
村  
茂  
子



## 序

民俗芸能の調査を繰り返してきた者にとって、ささらと呼ばれる楽器・用具、または芸能そのものに行き当っている回数は比較的多いのではないだろうか。楽器では、田楽躍の専用楽器といわれている編木びんぎと、主として田遊・田植踊・風流踊などに用いられている 簾すりざらの二種類がある。特に風流系の獅子踊では、楽器の簾や編木ばかりでなく腰差しのささらも用いられているし、種目名・演目名・獅子頭・演技者などまでささらと呼んでいる伝承地がある。

楽器としてのささらが最初に登場する文献は、『栄花物語』御裳着巻で、ここに記された治安三年（一〇二二）五月の田植えの場面に、「ささらといふ物突き」とあつて、このささらが簾なのか編木なのかについて混乱があるのはよく知られている。いずれにしても、現行芸能で楽器のささらを用いているのは田楽芸と風流踊に多い。ささらが、どのような芸能に用いられているかを具体的に知る目的で、ささらに関係ある芸能を網羅的にあげ、編木を用いているもの・簾を用いているもの・その他によって種目ごとに分類し、作成したのが、第一表「ささらを用いる芸能」である。また、芸能とは全く無関係なささらについても参考として第一表に加えた。単なる楽器ではおさまりきれない要素を持つ、ささらに対する日本人の心意を理解したいと考えたからである。以後、二種以上のささら、及び一般的にささらという場合にはひらがなを用いる。初めに、第一表に示した非芸能のささらについて簡単に説明しておく。

民具のささら↓その一種は台所道具の筥はさで、長さ二〇センチ程の竹を細かく割り、その一端を束ね、ここを持って様々な物を洗う。亀の子たわしの普及によってほとんど需要がなくなり、一般にはなじみのうすいものとなった。しかし、麴もちを使う酒・醬油の醸造所、板前、塗装職人など一部の職業では現在でも使用されている。同系統の物に茶筥がある。もう一種は麻の皮むき器で、鰹節を削る鉋と楽器の四つ竹の片手分がセットになったような物で、佐渡の相川郷土博物館で見つけた。勿論、現在この種の道具は使われていない。



## 第一表 ささらを用いる芸能

田楽芸	田楽踊	編 木	→田楽躍のほとんど
		簞	→日光二荒山田楽・淡路府中八幡田楽・島根県の簞神事・しっかく踊・隠岐の十方拝礼など
	田植神事	簞	→花田植・囃子田・伊雑宮御神田など
	田遊	簞	→板橋の田遊・懐山のおこない・西浦田楽・下呂田神祭・加治田の田神祭・春日大社御田植など
風流芸	風流踊	編 木	→綾織田植踊・二枚橋田植踊など
		簞	→田植踊のほとんど
	風流踊	編 木	→岩手県の念仏剣舞・神奈川県のささら盆踊・真家御魂踊・山口の県南条踊など
		簞	→第二表参照
巡遊芸	(獅子踊)	編 木	→秋田のささらなど
		簞	→関東地方を中心に分布する三匹獅子の多数
		腰 差	→鹿踊の何ヶ所か
		その他	→種目名・演目名・獅子頭・演技者など
その他	巡遊芸	編 木	→歩き巫子・熊野比丘尼など
		簞	→大神楽・念仏聖・説教(経)僧・千秋萬歳・鳥追・節季候
その他	その他	編 木	→こきりこ・組太鼓など
		簞	→陰囃子・民謡・組太鼓・行列の先祓いなど

## 非 芸 能 の さ さ ら

民 具→笊(物を洗う道具)・(麻の皮むき器)

呪 具→笊に「ささら三八」など書いた木札をつけて軒下などに下げる

職 業→笊を作ることで生活していた集団

建築用語→簞子・簞桁・簞目・簞戸など

そ の 他→細石・細川・細愛男・細愛女・細萩など

呪具のささら↓洗い道具の筧に「ささら三八」「ささら三助」などと書いた札をつけ、門口や軒下に下げて疫病や瘡よけの呪いとした。昭和二〇年代の末まで実際に見ることができたという。

職業集団のささら↓かつて、ささらと呼ばれていた人々がいた。彼等は、わずかな農業のすきに筧を作り、五節句や収穫期に近村を訪れてこれを配り、祝儀をもらうことで生活していた。駿河にいたささらを説経、伊勢で綿打ちをしていたささらをワタチ、また、茶筧を作っていた人々を鉢ともささらとも呼んでいた地域があったという。<sup>(注1)</sup>このように生業の主要内容によって様々な名称で呼ばれていた。筧は、これらの人々に祝い物としてもらう物であったところに大きな意味があると思う。

建築用語のささら↓<sup>ささらけし</sup>簾子（板壁を押さえる木）・<sup>ささらけた</sup>簾桁（階段の段板を受ける側板）・<sup>ささらめ</sup>簾目（壁仕上げの一種で、壁の表面につけた細かい筋目模様）などで、建築用語には鋸歯状のものと細かい筋目模様のもので二種類の形がある。鋸歯状の方は、楽器の簾の簾子（鋸歯状の刻み目をつけた竹または棒、左手に持ち右手の簾の親とすり合わせて音を出す）の形をした物であり、筋目模様の方は簾の親、または筧によってつけた模様であることがわかる。

その他の用語↓<sup>ささらいし</sup>細石・<sup>ささらがわ</sup>細川・<sup>ささらえおとこ</sup>細愛男・<sup>ささらえおとめ</sup>細愛女など、ささら音を立てる意味を含む小さいものをいい、筧・簾などもその意味の名称であろう。編木は、簾と同じような音を出す楽器であるところからの命名であろうといわれている。また、方言には、ささらさつと（ざつと・いささか）・ささらさつぼう（先端がささくれた）・ささらにする（すりへらす）などがあり、方言の方は、筧の状態を比喩的に表現したものが多い。

次に、第一表に示したささらと芸能の関係を述べ、その中で特に簾を使う風流踊について、その芸能・踊歌・伝播などの問題を考えてみたい。

## 一 ささらを使う芸能

第一表を見て最初に気付くのは、ささらに関係ある芸能が予想以上に多いことである。しかし、その多くが田楽芸と風流踊であり、その他には巡遊芸・民謡・陰囃子・組太鼓・行列などの中にわずかに見られるだけである。第一表に従って、各種目ごとに編木を使っている芸能と簾を使っている芸能に分けて簡単に説明しておこう。

### 1 田 楽 芸

田楽躍・田植神事・田遊・田植踊の田楽芸すべてに、なんらかの形でささらが用いられている。

田楽躍に編木が使われるのは当然のことであるが、簾を用いている伝承地もいくつかある。日光二荒山の田楽・淡路島三原町府中八幡の田楽・島根県の簾神事やしかく踊・同県隠岐の美田八幡や日吉神社の十方拝礼しやうはいれなど、田楽躍総分布件数の約一割りの伝承地で簾が使われ、各地独特の芸態で伝承されている。これら数ヶ所のうち、日光二荒山田楽以外の簾はすべて少年によって用いられ、特に島根県の四ヶ所では子ささらなどと呼ばれて、大人が用いる編木に対する小型のささらという意識がある。

田植神事、その一種は、広島・島根両県の山間部で囃子田・花田植・大田植などと呼ばれている田植に伴う芸能が分布し、実際の田植に際してリーダーのサンバイが簾で拍子をとりながら早乙女と掛け合いで田植歌をうたう。また、もう一種は、神社の神田で行われる田植えに演じられる様々な芸能である。後者の例には、三重県志摩郡磯部町の伊雑いぞろ宮御神田みみかみで演じられている芸能の一演目に「サイトリサシ」があり、ささらすりと呼ばれる二名の少年が「さいとりさしを見さいな／＼」という歌に合わせて、鳥追い棒を兼ねた簾を扱いながら泥田の中で一人づつ踊る。田植神事で編木を使用している伝承地には、まだ行き合わせたことがない。それは田遊についても同様である。

田遊は、簾を用いる代表的な芸能のように考えられているが、思いのほか例が少ない。田遊総分布件数の約一割りにあたる二〇ヶ所ほどの伝承地に簾が見られ、地域的には関東・中部・近畿地方に限られている。簾使用の演目は、「田植」「鳥追」「代かき」などで、それぞれ早苗・鳥追い棒・牛追い棒として使われている。早苗の場合は、簾の材料である竹のように稲が大きく健やかに成長し、竹を分割した物のような繁茂を祈念した結果であり、鳥追い棒の方は、鳥を追うことで、はらいきよめ祓清・予祝の意味をもつ呪具、牛追い棒はその展開として簾を用いていると考えられる。

田植踊は、東北地方に限って分布している田楽芸の一種であるが、風流踊に分類することも可能であり、ほとんどの伝承地で踊り手の中心となっている早乙女役が扇・簾・コキリコなどを演目によって使い分けている。「するす引」「田植」「稲こき」などに簾が使われ、田遊に比較して当てぶりの道具として用いられているようである。ごくまれに編木を持って踊る伝承地もあり、例えば、福島県相馬郡二枚橋の田植踊は、周辺地域に後して明治になってから始められたもので、特色を出すために簾の代りに編木を用いたと伝えている。

## 2 風 流 踊

風流踊は、太鼓踊・念仏踊・小歌踊・盆踊・採物踊・仮装踊・獅子踊などに分類することができる。これらの踊りの中で特にささらと関係が深いのは獅子踊であり、そのほかの踊りでは念仏踊・盆踊の中に編木・簾を用いている場合が多い。

獅子踊の多くが簾を用いているのに対して、編木を使用しているのが秋田県に分布しているささら獅子で、主として盆を中心に演じられている。秋田のほとんどの伝承地で、江戸初期に佐竹義宣が水戸から移封の折りに伴って来たと伝えられているが、その芸態には関東にない独特のものが認められる。編木を使っているのは、三匹の獅子と一緒に踊っている道化役で、伝承地によってザッサカ・カッキリ・オオジなどと呼んでいる。

秋田の三匹獅子がささらという種目名で呼ばれているように、関東地方でも種目名は勿論、演目名・獅子頭・演技者・芸態などまで〇〇ささらと呼んでいる伝承地がある。その他、東北地方に分布している鹿踊系統（しじ）の群舞の中には、ししがつける腰ざしをささらと呼んでいる伝承地が何ヶ所がある。獅子踊で簀（し）を使っている代表的な例は、関東地方の三匹獅子にみられる花笠、またはささらと呼ばれる役である。

獅子踊以外の風流踊で編木を用いている踊りには、次のような例がある。岩手県各地に分布している念仏剣舞の主役の一人で、編木は経文を現したものと、数珠をかたどったものとも伝えられている。また、茨城県新治郡八郷町（やしろま）真家の御魂踊（みたまおどり）は、念仏踊とも盆踊ともいわれ、笛・太鼓と共に獅子方の中の数人が編木を奏している。この踊りについて地元では、応仁（一四六七～六九）の頃旅僧によって教えられたと伝えられている。神奈川県足柄上郡・茅ヶ崎市・藤沢市などに伝承されているささら盆踊では、囃子方が編木を奏しながら歌をうたう。また、伝承地によって扇・手ぬぐい・太鼓・鉦などを持った者と一緒に編木を奏しつつ踊る演目もある。山口県岩国市各地に伝承されている南条踊では、大きな輪踊の中心で楽器や採物を持って踊る役の一つに編木が加えられている。この踊りも盆の供養踊として始められたと伝えられている。

右に記したように、編木を用いる風流踊は、盆に踊られる念仏系の踊りに限られていることがわかる。この場合も、後に述べる巡遊芸の簀（し）を携えた念仏聖や説経僧との関係を考え合わせ、田植踊の場合と同様に簀の代用として用いられるようになったのではないだろうか。簀を用いる風流踊については、本論として後に記す。

### 3 巡遊 芸

巡遊芸の場合、大神楽系獅子舞以外はすべてかつて行われていたものであり、実際にささらがどのような使われ方をしていたか知ることは不可能である。編木を携えていたと伝えられているのは歩き巫女・熊野比丘尼などであるが、巫

女の方とはともかく、比丘尼については「ビクザサラ」と呼ばれていたものが訛って「ビンザサラ」と呼ばれるようになったので、実際には簾を持ち歩いていたのではないかという説がある。

巡遊芸で簾を用いる唯一の現行芸能である大神楽系獅子舞は、簾を持つ役を次の三種類に分類して考えることができる。①天狗面（鳥兜をつけた猿田彦系の役で、獅子を誘導する露払いの役）②オカメ・ヒョットコなどの面（頬被りをした道化役）③唐子などそろいの扮装をした少年数名（獅子あやしをしたり獅子とともに踊ったりする役）となっている。大神楽系獅子舞に何故簾が用いられるようになったかについては、改めて考えてみたい。

また、かつて簾を持って諸国をめぐるっていたものに念仏聖・千秋萬歳・説教（経）師・節季候・鳥追などがあつた。

#### 4 その他の芸能

編木を用いている例に、富山県東礪波郡平村（ひがしなみのたいら）のこきりこがある。編木を持って踊っているのは、新しく振り付けされた田楽法師姿の者であり、囃子方の中には簾も加わっている。そのほか簾を用いているものに歌舞伎の陰囃子や組太鼓、神輿渡御などの先払いが持つ青竹の棒の先が、細かく割れているのも簾の一種と考えられる。これらの中には、風流芸に分類すべきかと思われるものも含まれている。以上、筆者が知り得た範囲でささらと芸能の関係を整理してみた。次に、本論として簾を用いている風流踊（獅子踊を除く）に関する問題点について考えてみたい。

### 一一 簾を使う風流踊

#### 1 簾は採物か楽器か

簾を使っている現行風流踊（獅子踊を除く）における役柄によって、簾の使い方を分類すると次のような三種類が考えられる。

(1)踊子の採物 (2)踊子の一部が奏する楽器 (3)道化・先導役の採物 この分類に従って、作成したのが第二表「簞を用いる風流踊（獅子踊を除く）」である。

(1)には、ハケ所の例をあげることができた。そのうち六ヶ所では、踊子のほぼ全員が同時に簞や他の採物を持って踊り、残りの二ヶ所では踊子の一部が簞を持って踊る。ハケ所の芸能それぞれについて簡単に説明すると、次のような芸能で踊られている。

1 岡山県歳末の念仏踊は、鉦留太鼓を打つ者一名を囲んで、村の老若男女が念仏を唱えながら簞をすりつつ順まわりに輪踊をする。

2 三重県立神のささら踊は、腹に羯鼓を付けて打ちながら踊る三名の青年を囲んだ輪踊で、三六名の少年と一三名の青年が簞をすりつつ囃子方の歌に合わせて逆まわりに踊る。五演目の伝承曲中「コキリコ」の時だけ簞をコキリコに持ち代える。

3 静岡県平野・有東木等の盆踊は、男踊と女踊に分かれて交互に踊られ、踊る時の持ち物によってささら踊・コキリコ踊・長刀踊・開き扇を持つ歌舞伎踊・閉じ扇を持つ拍子踊・持ち物なしの手拍子踊に分類され、それぞれにいくつかの演目がある。最後に踊る男踊の長刀踊以外はすべて輪踊であり、女踊りの輪の中には、張り笠と呼ばれる城の形をした大灯籠を被った者が一名入って踊り、これを中踊と呼んでいる。

4 千葉県白間津のささら踊は、腹に小さな太鼓を付けて打ちながら踊る二名の少年と九名の大人の歌方を囲んで、二〇〜三〇名の少女が簞をすりながら輪になって踊る。前三ヶ所の例が盆に踊られるのに対して、この踊りは日枝神社の祭礼に他の芸能と一緒に踊られている。しかし、右にあげた三ヶ所とは、簞を持つ者すべてが中踊を囲んで踊るガワ踊の踊子という点で共通している。

5 長野県別所温泉等のささら踊は、三匹獅子の後で二〇〜三〇名の少女が簞をすりながら輪になって踊る。囃子は

第二表 籠を用いる風流踊（獅子踊を除く）

分類	事項 番号	種 目 名	伝 承 地 名	期 日	場 所	資 料
ガ ワ 踊 の 採 物	1	歳末の念仏踊	岡山県御津郡加茂川町	8月16日	観 音 堂	「まつり通信」 286・300
	2	立神のささら踊	三重県志摩郡阿児町	（5年目毎の） 8月14・15日	広 場	「まつり通信」 286
	3	平野・有東木等の盆踊	静岡県静岡市	8月14・15日 8月14～16日	少 林 院 寺 東 雲 寺	『平野・有東木の盆踊』市教委
	4	白間津のささら踊	千葉県安房郡千倉町	（5年目毎の） 7月14～16日	日枝神社 御 旅 所	パンフレット
	5	別所等のささら踊	長野県上田市別所温泉等	7月15日		
	6	下仁井田のささら踊	福島県いわき市四倉町	（数年に一度） の豊年 8月26～28日		『ふくしまの民俗芸能』懸田弘訓著
	7	伊勢路のかんこ踊	三重県渡会郡南島町	不 定 期		
	8	寒水のかけ踊	岐阜県郡上郡明方村	9月8・9日	中 桁 家 白山神社	『芸能の科学』 3
踊 子 の 楽 器	1	黒部等の踊子	京都府竹野郡弥栄町等	10月9・10日	深田神社	『京都の田楽調査報告』府教委
	2	下笠等のサンヤレ	滋賀県草津市等	5月3日	老杉神社	「民俗芸能研究」3・パンフレット
	3	平井の鳳凰の舞	東京都西多摩郡日の出町	9月29日		パンフレット
	4	竹富町等のささら銭太鼓	沖縄県八重山郡	種 取 祭		『南島探訪記』 本田安次著
道 化・先 導役の 採物	1	越路の雨乞踊	鳥取県鳥取市越路		越路神社	「民俗芸能」32 『民俗芸能と歌謡の研究』
	2	大海・鳳来町等のほうか	愛知県新城市・愛知県北設楽郡	盆		『鳳来町のほうか』町教委他
	3	油日の太鼓踊	滋賀県甲賀郡甲賀町	5月1日	油日神社	『油日の太鼓踊』保存会
	4	中津屋の嘉喜踊	岐阜県郡上郡白鳥町	（数年毎の） 9月15・16日	白山神社 八幡神社	
	5	沼宮内の駒踊	岩手県岩手郡岩手町			『岩手県民俗芸能誌』森口多里著



獅子踊の時と同じで、獅子踊にはうたわれない歌がうたわれ、その詞章は各地独特である。しかし、基本的には各地に分布する獅子踊歌とおなじである。

6 福島県下仁井田のさいさい踊は、三匹獅子に先立って、一五〇一六名の青年が道化面に頬被り、男根型の簪をすりながら輪になって踊る。

右の5・6の例は、本来獅子踊の一部として踊られるべきものが、単独の輪踊に独立して踊られるようになったと考えられ、前四ヶ所の例とは少し性格がちがう。しかし、踊子全員が同時に簪を持って踊る点で共通している。

7 三重県伊勢路のかんこ踊は、腹に羯鼓をつけて踊る六名の青年を囲んで、二一名の簪を持った青年と一八名のテシコラ棒と呼ばれる物を持った少女が交互に並んで輪になって踊る。

8 岐阜県寒水のかけ踊は、腹に太鼓をつけた青年三名と鉦をつけた青年一名の四名を囲んで、簪を持った女装の小学生一六名が、作り物の鉾を持った中学生一六名と対になり、その他奴・花笠・道化など多勢の諸役といっしょに輪になって踊る。

以上、八ヶ所の踊りに用いられている簪を楽器ではなく採物として分類したのは、次のような理由による。①簪を持って踊るのは、ガワ踊またはそれに類する輪踊の踊子である。(太鼓・鉦などを打ちながら輪踊の中心で踊る中踊は雛子方も兼ねているが、それとは別に雛子方がいる。)②立神のささら踊・平野や有東木の盆踊・白間津のささら踊では、演目によって扇・コキリコ・採物なしなどに変化し、簪が、他の採物と同等に扱われている。③伊勢路のかんこ踊・寒水のかけ踊では、簪を持つ役が、棒・鉾・綾竹など他の採物を持つ諸役と同じように扱われている。

(2)踊子の一部が奏する楽器では、次の四ヶ所をあげることができる。

1 京都府黒部等の踊子は、子供組によって演じられ、年齢の高い順に太鼓打、太鼓持各三名・腰つきと呼ばれる腹に羯鼓をつけた者六名・簪六名が楽器ごとに一对の形で二列縦隊に並び、太鼓役の前には大人の鬼役、簪の後ろには大

人の弓持各一名がついて町内を練り歩き、その隊形のまます所要所で楽器を奏しながら各楽器ごとにちがう動きをして踊る。歌はない。

2 滋賀県下笠等のサンヤレは、大人の鼓打一名を先頭に少年の棒振一名・鉦打一名・簀二名・スコ打と呼ばれている腹に羯鼓をつけた者二名・大人の鉦すり二名・笛吹四名・少年の太鼓打二名と大人の太鼓受二名が、各楽器ごとに二列縦隊になり、シンガリに大人の音頭取三名がついて神輿の先導をしてまわる。京都の踊子と同じように所要所で各楽器ごとに向き合い、音頭取を加えてコの字型になって簡単な踊りをする。音頭取が踊りながらうたう歌は、意味不明なものとなっている。

右の1・2は、近畿地方に分布しているケンケト・羯鼓すり・笛囃子などとも呼ばれる囃子物系統の芸能である。<sup>(注2)</sup>

3 東京都平井の鳳凰の舞は、踊り場の中央に鉦留太鼓の胴を地面につけて置き、鳳凰の被り物をつけて桴を両手に持った青年四名・赤い頭巾をつけて簀を持った青年四名が、交互になって太鼓を囲み、その外側を軍配扇持・小太鼓打各一名がめぐって、囃子方の笛・歌に合わせて逆回りに楽器を奏しつつ踊る。

4 沖縄県竹富町等のささら銭太鼓は、太鼓・四ツ竹・銭棒・銭引<sup>じんひき</sup>(独特の形をした簀)を奏する者各二名が、二列縦隊で登場し、同じ楽器の者どうしが向き合って踊る。

右の四例を(2)に分類したのは、次のような理由による。①簀をする踊子が太鼓・羯鼓・鉦などの楽器を奏する者と全く同等に扱われている。②演目によって楽器を他の採物に替えることがない。

(3)道化・先導役の採物には、次のような例がある。

1 鳥取県越路<sup>こえじ</sup>の雨乞踊は、簀を持ち、オカメ・ヒョットコ面をつけた道化役各一名が、太鼓打一四名・扇を採物にした少年の踊子一名・新発意一名など、総勢五〇名程の行列の先導を行う。

2 愛知県大海<sup>おほみ</sup>・鳳来町のほうかは、団扇型の負い物をして腹に太鼓をつけた者三名・ささら竹と呼ばれる負い物に

簾を持った道化役と呼ばれている者一名の四名が、鉦・笛・歌の囃子に合わせて踊る。道化役は大海・豆蔵、鳳来町でボロと呼ばれ、後に記すように、かつて複数の踊子だった者が変化した形式と考えられる。

3 滋賀県油日の太鼓踊は、総指揮者一名・貝吹四名・ダテ貝二名・歌四名・地引太鼓二名（大踊の時のみ）・踊子六名の行列の前後に、簾持の鬼と軍配扇持の鬼二名、つづいて四名がついて警護し、鬼役は踊りに際しても拍子の変り目を知らせる重要な役目を果たしている。

4 岐阜県中津屋の嘉喜踊は、(1)にあげた寒水のかげ踊と同系統の踊りであるが、ガワ踊の中に簾役は見られず、先導役の烏天狗の扮装をした者だけが簾を持って行列に加わっている。

5 岩手県沼宮内の駒踊は、簾を持った少年一名が、駒頭を持ち馬に乗っているような形の扮装をして群舞する者たちの行列を先導する。

右にあげた五ヶ所の例を採物としたのは、次のような理由による。①踊子でも囃子方でもなく行列を先導する役柄を象徴する物として簾を持っている。②愛知のほうか・滋賀の太鼓踊の道化役・鬼役は、踊子としても重要な役目を果たしており、簾は、かつて踊子の採物であったものが先導役を示す採物としても用いられていると考えられる。

風流踊に用いられている簾が、採物であるか楽器であるかについて結論を出す前に、もう一度(2)踊子の一部が奏する楽器の四ヶ所の例にもどって考えてみたい。1・2の例である黒部等の踊子と下笠等のサンヤレで、簾を奏しているのは楽器を扱う少年たちの中でも最年少者であり、あまり高度な技術が必要とせずに出ることが出来、そのつど参加・不参加の人数を自由に換えられる性格をもっている。この性格は、ガワ踊のそれに通じるものであり踊子・サンヤレなどが、風流踊に展開する以前の古い形式を伝えた囃子物系統の芸能（注2参照）であるならば、次の段階の輪踊で、簾役がガワ踊として登場してくるのは当然のなり行きである。

(2)の3の例である平井の鳳凰の舞は、一見独特の踊りであるように感じられるが、踊歌の詞章の規範となっているの

は、明らかに獅子踊歌であるところから、周辺に無数に分布している三匹獅子を意識しながら新しく構成した芸能であったと考えられる。ここでは、簾役も太鼓打に合わせてすっかり人数が決められていて、太鼓打と同じように、ある程度訓練しなければ踊ることができない芸態を示しており、簾を太鼓と同じに楽器として扱っている。

(2)の4の例にあげたささら錢太鼓は、その簾の名称からして錢引という独特のものであり、形も大変変わった物である。しかし、踊りの形式は踊子・サンヤレなどに近いもので、古見の錢太鼓踊について本田安次氏は次のように記しておられる。「内地の田楽躍そのまゝであるには驚かされた。」<sup>(註3)</sup>つまり、田楽躍風のものに編木に代わる簾(この場合は錢引と呼ばれる特殊な物)を用いた。

右にあげた獅子踊を除く現行風流踊の例では、簾の用い方について、古い形式を残していると考えられる二列の踊りは楽器として、また中踊を中心とした輪踊は採物として、更に獅子踊から展開したと考えられる踊りは楽器として扱われているところから、楽器↓採物↓楽器という流れが一つ考えられる。

それとは別に、(3)の例にあげた呪具的な意味をもつ採物の流れがある。本来、風流踊に簾が用いられる発端となった理由の一つは、祓清の呪具としてであったと思う。何故なら、ここで改めて第一表を見ると、その他の芸能を除いて、ささらを用いているのは、田楽芸と祓清・祝福に関係ある芸能に二大別でき、風流踊は後者に属する。簾を手にして徘徊していた中世の念仏聖や放下僧の影響を受けて発生したと考えられる盆の囃子物や念仏踊では、簾は踊子の先導役であることを象徴する呪具であった。行道に中心がおかれた時期には、田楽躍の形式をまねた囃子物の楽器として、やがて、町辻や広場などの踊り場で中踊を囲んだ輪踊の形式が定着すると、最後部にくっついていった最年少の簾役はガワ踊となり、簾は演目によってコキリコなどと代えられ、採物と同じ扱いを受けるようになった。しかし、初期の呪具的精神は常に失われることがなかった。

## 2 その他の諸問題

# ア 立神のささら踊歌と白間津のささら踊歌

立神と白間津のささら踊は、両者とも(1)踊子の採物の例にあげたもので、前者の伝承地は三重県志摩郡阿児町、昭和四と九の年にあたる五年目ごとの八月一四・一五日に行われている盆の供養踊である。踊りの途中で念仏を唱えることはないが、踊り終了と同時に見物人も広場の中心に集まって来て、演者と一緒に厄除けの念仏を唱える。最近では昭和五九年に行われた。次に行われるのは昭和六四年である。

後者の伝承地は千葉県安房郡千倉町、こちらもほぼ五年に一回の割合で七月一日と一六日の日枝神社祭礼に他の芸能と共に奉納され、最近では昭和五八年に行われた。立神が少年の踊りであり、盆踊または念仏踊ともいうべきものであるのに対して、白間津は少女の踊りであり、祭礼の奉納芸の一種目となっている。立神では、既に述べたように五演目を伝えていて、そのすべてを一定の順序に従って二日間とも同じ演目を繰り返す。白間津では九演目を伝えており、一回の踊りで二・三演目が踊られる形式なので、ガワ踊の採物が鰯である共通点を除くと、多くの面でかなり違った印象を受ける。しかし、両者の演目名と踊歌の詞章内容を比較して見ると、白間津の九演目の中には、立神の五演目全てと共通している部分があることに気付く。その状態を表に示したものが第三表「立神・白間津ささら踊歌の比較」である。

両者の入端踊にあたる立神の「ささら小踊」と白間津の「振込」は、いずれも庭誉め・屋敷誉めを内容とする詞章になっている。立神二番目の演目「あやおり」に対して、白間津には「綾織踊」があり、詞章内容はちがったものとなっている。立神三番目の「なが拍子」には白間津の「牛若丸」があり、両者とも牛若丸のことを内容とした詞章である。立神四番目の「こっきりこ」に対しては白間津の「小切子踊」があり、詞章内容は違っている。立神最後の「ひき踊」に対して白間津は「御寺踊」で、両者とも寺を誉める詞章内容となっている。このような踊り歌に関する共通のしかたは、あまりにも似すぎており、全く無関係なところから起こってくるものではない。地理的に考えて立神から白間津へ

[illegible]

「里は雨かよふとはあられ　ひんさりひんざりとふりくる」というもので、この種の詞章は、じんやく系太鼓踊歌・獅子踊歌としてなじみ深いものである。平野の現行ささら踊では、男踊に「一七ささら」・女踊に「かつぎささら」という二演目が伝承されているだけであるが、かつて両者とも更に何曲かのささら踊が行われていた。その中の一つ女踊の「かたずり」は、寺や総代の家の庭入に必ず踊ったもので、その歌の最初の詞章は「をやかたさまへまいりてみれば　いちのもんひらき　にのもんひらき　こがねのもんをおしひらき」（以下、屋敷ほめの歌が続く）というものである。このような歌詞構成は、じんやく系太鼓踊の「大じんやく」の歌詞構成と全くおなじである。じんやく系太鼓踊の詞章が、風流系獅子踊ばかりでなく盆踊にも見られ、獅子踊や平野の盆踊で、簞を採物としたガワ踊、またはガワ踊的存在が重要な役割を果たしているのを考えた時、逆にこの事実が、じんやく系太鼓踊には簞を採物としたガワ踊の存在が常の形式であったことの証明になるのではなからうか。

第二表におけるじんやく系太鼓踊は、(3)道化・先導役の採物に分類した油日の太鼓踊だけであり、現行じんやく系太鼓踊に簞を採物としたガワ踊がついている例を見る機会に恵まれていない。しかし、青盛透氏の指摘によって、かつてじんやく系太鼓踊には演目によってウチワとササラを持ち変えて踊るガワ踊の存在があり、この様式はほとんど行われなくなっている。その理由として、ガワ踊の振り付けがシンプルであり、規模の縮小にもなって簡単に姿を消し、ガワ踊の主体は子供・年寄り・女性の場合が多かったことをあげている。<sup>(注5)</sup>

筆者はかつて、じんやく踊の名称について、順逆踊の転訛したものではないかと考えた。その理由は、じんやく踊歌の囃子詞になっている「じんやくやー」という部分で、腹に太鼓をつけた踊子が順逆に回って回り返す振りを繰り返すことが多く、この囃子詞と振りで「じんやく踊」が神降ろしに係わる儀礼的な演目であろうと考えた。<sup>(注6)</sup>しかし、この時はまだ簞との結びつきにまで考えが至っておらず、その後、簞を扱う花笠役を通して獅子踊がじんやく系太鼓踊の一展開であろうと考えるようになった。更に今、江戸末期まで行われていた簞を採物とした儀礼的な盆踊歌が、じんやく系

太鼓踊の「大じんやく」と同じ詞章であることから、風流踊の入端・引端などの儀礼的な踊りと鉦は、切りはなすことのできない重要な関係にあると考えている。

# ウ 大海・鳳来町のほうか

愛知県に分布しているほうかに関しては、鉦を用いる役を③の道化役に分類し、大海と鳳来町では芸能が少し違っていて、前者の道化を豆蔵・後者をボロと呼んでいることは既に記した。江戸末期の「三河国吉田領風俗問答<sup>(注7)</sup>」には、渥美郡・八名郡（現豊橋市）周辺に行われていた放下の報告がなされていて、これらの郡は鳳来町・大海に接した渥美半島に入りこんだ地域であり、次のように記されている。「……十四日朝より昼夜とも、老若をいはず人数十人にて、二十人にて子供を加えて一組（或は二組、三組）として、初盆のものある家々を廻すこと也。鉦、太鼓、笛を打吹もの三五人、ザイフリ（塵拂の如き物を持）二人也。此外に附添ひて謡ふもの、世話やき的人数は定りなし。子供は八人（或は六人、十人）皆白き細袖の襦袢、ももひきなり。大人は白き浴衣なり。（近世は常の衣服を着）子供の内二人はカッコとして小さき太鼓を胸の所に掛けて、バチを二本（猿楽の羯鼓舞の如し）青竹長さ三尺余なるを幅一寸斗に割て、さて本の方七八寸残し、末の方を三つに割て細くけづりて、紙を（切目をつけて）巻。（ヒレの起こるやうにするなり）末の方に小さき石を付けて（シナヘルやうにしたる物也）櫛となづけて背へさす也。残六人（或は八人、四人）ささらを持、笠を冠るなり。（……中略……）此一組のものを道路を廻る時は鉦、太鼓打、笛を吹ながら念仏を高声に唱ふる也。（……中略……）入来る次序は先づ火ブクラ（挑灯なり）カッコ、ササラ子なり。かくの如く居並て子供は皆筵の上に座し、大人は子供の後などに立て居るなり。○初むる時は先づ鉦をうちて念仏なり。それより放下の謡物になると、鉦を止めて太鼓、羯鼓のみなり。笛をば入るゝ事もあり。六人の子供（さゝら子は）拍子につれて踊るなり。踊るとても居ながらサ、ラをすり、又はサ、ラ（さゝらの本の方に、紙にて総のつけてある）を逆に諸手にて二本を一つに持て（かのふさの方を白ふにして）左右へゆるやかにふり、或はサ、ラをわけて両手に持ちたるまゝにて、膝の側へ



両手つき居て、頭ばかりを左右へいさゝかふり、又はうなづく如くするのみなり。(……以下略……)」

長い文章を引用したのは、放下の芸態が例にあげた現行大海・鳳来町のほうかとかなり異なり、簀を持ったささら子と呼ばれる子供の踊子が六人八人加わっていることを示すためである。ここでは演目についての記載はないが、ささら子の振りは明らかに簀を採物として扱っている。また、謡物として記されている詞章の内容は、立神や白間津のささら踊歌と同様の庭ほめ歌などがあり、放下は輪踊には至っていないが、ささら子に対する考え方は、輪踊のガワ踊に近いものであったことがわかる。それが道化役として残った理由については改めて考えることにし、ここに記された放下の形式が、サンヤレ・ケンケン・踊子など風流囃子物系統の芸態に近いのは、初盆の家々を廻る行進の方に重点がおかれていた結果ではなかったろうか。

## 結

第一表にあげたささらを用いる芸能の多くが、豊作を祈願することを目的とした田楽芸と、祓清・祝福を目的とした巡遊芸・その系統に属する風流踊に二大別して考えられることは既に述べた。しかし、風流踊の中には、田楽芸系統の影響と思われる部分も認められる。ここでは、ささらがなぜ豊作祈願と、祓清・祝福の呪具として用いられることになるかを考えてみることで、結びとしたい。

ささら、特に簀や筥は竹を細かく割ったものを束ねた簡単な物であり、その材料となっている竹は稲科の植物で、約半年の間に第一次成長を完了するという。主として、熱帯・亜熱帯に生殖し、古くから様々な用途に用いられ、日本には約一五〇種の竹が自生している。文献の上に初めて竹が見られるのは『古事記』であるが、それ以前から様々な道具に加工されていたことは明らかであり、例えば、新潟県西頸城郡青海町（おうみ）の寺地遺跡からは、縄文時代の櫛一〇点が出土していて、これらは、竹を丸く削った九本前後の歯を台にはめこむ形式の高度な技術の物であるという。

このような事実から、稲作文化をともなった弥生時代に、筥のような単純な道具が使用されていた可能性は充分に考えられる。また、稲作を生業とした人々が、田植えに際して豊作を祈るための呪具が必要であると考え時、竹を細かく割って束ねたような物を使って離立てる行為は、三重四重の効果を期待できた。それは、次のような理由による。①竹のように速く、たくましく、立派に成長してほしい。②その竹を細かく割った物のように繁茂してほしい。③細かく分割することはハヤスに通じ、それを使って離立てることは三重の掛詞となり、労働を鼓舞すると同時に言霊信仰の上でも豊作を祈ることになった。

もう一つ、祓清・祝福のための呪具と考えられるようになったのは、次のような理由ではなかったろうか。筥は本来、物を洗い清める道具である。この具体的な事実が祓清の呪具になりうる条件を満たしている上に、既に記したごとく、ささらと呼ばれていた人々が、節季ごとに持つて訪れてくる祝儀物であった。このようなところに具体的に物を清潔にするのとは別の呪力を期待していたことは明らかである。

豊作祈願と祓清・祝福という機能を合わせ持った筥を携えて徘徊していた季節的祝福芸能者に鳥追がある。文献に鳥追が登場するのは江戸時代になってからであるが、戦国時代の笑い話を集めた『醒睡笑』巻一には、次のような記載がある。「……千秋萬歳とも、又鳥追ともいふかや、家毎にありきて慶賀をうたふに、千町萬町の鳥追が参った。といふて、……」散所民・声聞師などと呼ばれていた人々によって正月に演じられた千秋萬歳は同時に鳥追でもあり、新年に筥をすつてめでたい歌をうたうことで害鳥・害虫を追い払い、豊作祈願の予祝を行った。

風流踊に取り入れられた筥も、それが楽器としてであれ、踊子の採物としてであれ、それを受け入れた人々の意識には、常に千秋萬歳・鳥追の筥と同じ機能を期待する気持ちがあったにちがいない。

〔注1〕「毛坊主考」(『定本 柳田国男集』第九卷)

〔注2〕「民俗芸能における囃子物の様式——サンヤレ・ケンケト・踊子・笹囃子——」(青盛透・『民俗芸能研究』第3号)

(注3) 『南島探訪記』(本田安次著・昭和三七年・名善堂書店)

(注4) 『平野・有東木の盆踊』(昭和五六年・静岡市教育委員会)

(注5) 「風流踊の構造——囃子の位置をめぐって——」(青盛透・『民俗芸能研究』創刊号)

(注6) 「じんやく踊考」(中村茂子・『芸能の科学』一〇号)

(注7) 『日本庶民生活史料集成』第九卷

(注8) 東洋文庫・三二